

# 時空の漂泊

(二〇〇五年四月一日 第十号)

谷 弘一

## 川蒸気 浮かぶホテル — に乗って

今からほぼ二百年前、十九世紀初頭のアメリカ、夏のニューオーリンズが見える。帆もなければオールもない川蒸気船がミシシッピ川を遡航そこうしている。大きな煙突から煙をもくもくと吐き出している。大きな水車で濁った川の水を豪勢ごうせいにかき回している。外輪船がいりんせんである。

船内は、サロン、ボール・ルーム、ダイニング・ルーム、カクテル・ラウンジ、客室、どれも実に豪華な造りになっている。

ジンをベースにベルモット(葡萄酒にヨモギなどの成分を浸み出させたもの)などを加え、それにオリブの実を入れたカクテル。

ウイスキーをベースにベルモットなどを加えたカクテル。

蒸し暑いのを我慢し、ブラック・タイを締め、山高帽やまたかぼうを被りかぶ、ステッキを小脇にカクテル・ラウンジに行く。仮装パーティーである。ジャズの喧騒なりズムが外輪が水を巻き上げる音と一緒に沸きあがっている。マティーニやマンハッタ



ブランドーに氷を入れ、ジンジャーエールで満たし、それに薄くらせん状に切り取ったレモンの皮の上端をグラスの縁にかけて入れたカクテル。ダービーの本場イギリスで優勝したジョッキの祝杯用に作られたという。

ンやホーシズ・ネック(馬の首)、マルガリータを片手に、着飾った紳士、淑女が賑やかに談笑にぎしている。集まっている人々の底抜けに明るい顔を別にすれば、豪華なホテルの佇まいたたずである。豪華ホテルが豪勢に水を跳ね上げて走っている。

川蒸気はアメリカ人のヨーロッパへの憧れあこがをのせて走る船上ホテルである。同時代、イギリスで馬車の延長線上で鉄道が走り始めたのとは全く違う形で蒸気機関がアメリカでは普及し始めた。イギリスのストックトンとダーリントンの間を初めて蒸気機関車は走ったが、同じ線路上を、当初は車輪を付けた馬車

テキーラ(竜舌蘭から作られた酒)をベースにライム・ジュースなどを加えたカクテル。

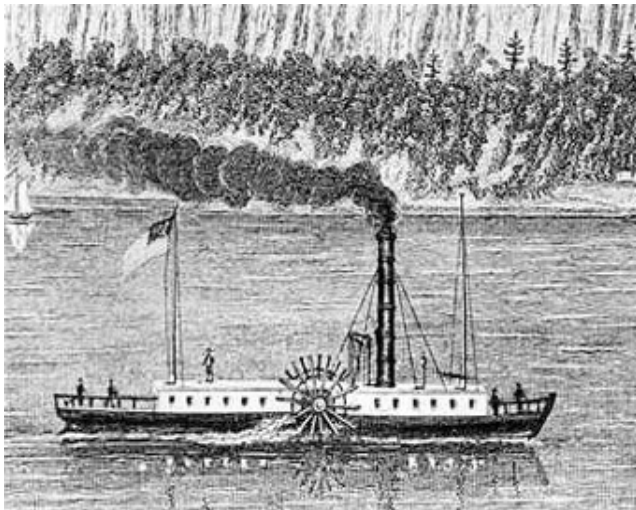
も走っていたそう。ちなみに列車の客車を指すコーチ (coach) という言葉は大型四輪馬車——語源はハンガリーのコーチ (Kocs) という村名。同村で作られた四輪大型馬車が優れており、四輪大型馬車そのものを指すようになった——からきている。蒸気機関を使った交通手段が、イギリスでは馬車の延長線上で発達したのに対し、新大陸のアメリカでは、鉄道よりもまず川蒸気という形で発達したことは興味深い。

### 鉄道に先行した蒸気船

実は調べると、イギリスでも蒸気機関車よりも外輪船の歴史の方が古かった。一七八八年、イギリスの湖で外輪船がいらんせんの走行実験が行なわれた記録がある。トレビックがロンドンの広場でレールに乗せ

一七六五〜一八二五年。アメリカの発明家。蒸気船クラモ

た蒸気機関車を走らせたのが一八〇九年だったから、それよりも二十年以上も前のことである。ワットがニューコメン蒸気機関を改良し、さらに蒸気機関の上下運動を回転運動に変える改良に成功したのは一七八一年のことだったから、その七年後には蒸気船の走行実験が行なわれていたことになる。



ント号を建造し、ニューヨークとオルバニ間に就航。

この外輪船がいらんせんは新大陸のアメリカでいち早く導入された。一八〇七年にロバート・フルトン (Robert Fulton) のクラモント号が登場し、一八一五年までにはアメリカの河川の運搬手段の主力は蒸気船に取って代わられた。そして一八一九年には蒸気船による大西洋横断も行われた。アメリカでは鉄道よりも、まず蒸気船という形で蒸気機関は普及していったのである。イギリスでストックトンとダリントンの間で蒸気機関車の営業運転が開始されたのは一八三〇年のことだから、それよりもアメリカでの蒸気船の普及は実に二十年あまりも先行していたことになる。

ニューオルリーズで豪華な川蒸気に乗り込み、デッキで心地よい風を受けながら考え込んでしまった。

アメリカでは、何故、豪華な蒸気船が河川や湖沼を我がもの顔に走り回っているのだろう。遥か彼方の日本の島は徳川家斉いえなり（一七七三〜一八一四）の治世である。杉田玄白は「蘭学事始」を一八一五年に書きあげた。家斉の治世後、外国船が日本沿岸に来航して騒がせるようになったのに音を上げ、幕府は一八二五年、異国船打ち払令を出した。



一七七三〜一八一四年。田沼意次を排し、松平定信を老中にして、学問を奨励、寛政の改革を行った。隠居後も大御所と称して実権を握った。側室四十人、子女五十五人を数えた。蘭学に関する回想録。「解体新書」翻訳の苦心談などを通

しかし、当時の日本の舟運の主役はまだ帆掛け船だった。長崎の出島で細々と幕府直轄貿易が営まれていたが、そこで見かける貿易船もオランダの帆船か清のジャンクだった。

改めてアメリカの川蒸気の盛大な運行の背景を調べたら、アメリカ開拓の歴史に纏わる錯誤に気付いた。インデアン、騎兵隊、銀行強盗、大陸横断鉄道などが主役の西部劇映画のイメージなどが刷り込まれ、それにすっかり引きずられていた。アメリカ大陸の開拓の歴史は、先ず、ヨーロッパと船で直接に繋がる大西洋沿岸から始まり、その延長で船が入ることのできる河川と湖沼に沿って進んでいったのが真相のようだった。決して馬と幌馬車ではなかった。アメリカ大陸は

船舶が航行できる大河川と大湖沼に恵まれていた。

建国時代のアメリカ人の生活圏は川や湖沼とピツタリ結び付いていた。だから蒸気船の導入が蒸気機関車に先行したのは当然だろう。ミシシッピの華麗な賭博師でもあったバット・マスターソンがアメリカ開拓を彩るスターだった。アメリカ映画は、未知の人、馴染みのないビリー・ザ・キッドを起用して興行成績を稼いだ。お陰で、アメリカ開拓の名誉まで馬とカウボーイが攫ってしまったようだ。もっとも、これは私が見ただけのアメリカの開拓とアメリカの西部開拓を混同していただけのことかも知れないのだが……。

じて日本の蘭学の播種期について書かれている。一八五六〜一九二一年。アメリカ西部開拓時代のガンマン。カンサス保安官の後、ルーズベルト大統領の要請でニューヨーク連邦保安官助手に。その後、新聞記者に転身。

一八五九〜一八八一年。アメリカ西部の無法者。二十一歳で射殺されるまでに二十一人を殺したといわれる。

## 海を渡る蒸気船艦隊の登場

蒸気機関はアメリカで船に載せられ、アメリカ開拓とアメリカン・ライフの形成の大きな牽引力となった。さらにアメリカの河川や湖沼で育った蒸気船は帆船に代わって世界の海に出て行くことになった。その先兵となったのは軍艦だった。アメリカは一八一四年、イギリスに先駆けて蒸気機関を搭載し、それを推進力とする軍艦を建造した。

蒸気機関を発明したイギリスで、蒸気機関で推進する軍艦が進水したのは、アメリカより一九年も後の一八三三年のことである。当時、イギリスはすでに世界の七つの海に展開する大帆船艦隊を擁していた。多分、それが足枷あしかせになって、こ

一八四〇〜一八四二年。清の阿片密貿易禁止をめぐる英国と清朝の戦争。一八世紀末以降、イギリスが中国からの茶や絹織物の輸入に必要な銀を確保するため、インド産アヘンを

れらを蒸気機関推進に切り替えることを決定するのに一九年間も逡巡しゆんじゆんする結果になってしまったのだろう。

同時代の江戸に目を移すと、十八世紀後半にはロシア船が蝦夷地えぞちに来航し通商を求め、十九世紀に入ると薪炭しんたんや通商を求め、アメリカやイギリスの船も来航するようになっていた。一八一八年にはイギリス人ゴールドンが浦賀にやってきて貿易を求めた。こうした諸外国の帆船が来航して騒然となり始めたなか、一八二五年、幕府は異国船打払い令を出した。しかし、まだ帆船が主役の時代だった。

日本に蒸気機関で推進する船舶が初めて出現したのは、有名なアメリカのペリ―提督率いる黒船で、賀沖に来航したの

中国に持ち込んだ。中国では阿片吸煙の害が政治問題化、阿片貿易による銀の国外流出は財政問題になった。このため中国は阿片の没収、棄却など強硬策を採ると同時に、英国との

は一八五三年のことである。

この時、アメリカはすでに四十年近い蒸気機関推進の軍艦の運用実績を持っていた。この黒船を目の当たりにした徳川幕府の首脳は、アヘン戦争に中国清朝が敗れ、それを契機に中国が植民地化されることになった事態を思い浮かべたに違いない。それに徳川幕府の将来を重ね合わせただろう。

阿片戦争あへんが始まったのは一八四〇年だが、一八四二年に、イギリスが軍艦十

交易を禁止した。これに対してイギリスは一八四〇年に遠征軍を派遣。一八四二年、総攻撃するイギリス軍に清は大敗、南京条約締結。清の鎖国は崩れた。



余隻を派遣して沿岸域を攻撃し、さらに揚子江を溯<sup>さかのぼ</sup>って南京に迫ったために、清朝は和を請うこととなったと歴史書にある。広大な大陸国家の清朝が大敗し、和を請うことになった決定的な要因は、揚子江を遡<sup>そこう</sup>行して南京に迫った英国艦隊だったようだ。

ところでアヘン戦争に参戦したイギリス軍艦が、いったい帆船だったのか蒸気船だったのかだが、アヘン戦争が勃発した一八四〇年という年は、イギリスが初めて蒸気機関を軍艦に採用してから七年後に過ぎないこと、イギリス艦隊が揚子江を南京まで溯<sup>そこう</sup>航したのは一八四二年になつてからのことなどから推測すると、

イタリアのジェノバで生まれ。数学者らの影響も受け、大西洋を西航してインドに達せると考えた。一四九二年スペイン宮廷の援助を得ることに成功。サンタ・マリア号など三隻の船で出帆、一四九二年十月バハマ諸島の島に上陸。新大陸

多分、まだイギリス艦隊の主力は帆船であつて、蒸気機関推進の軍艦は艦隊のごく一部を占める存在でしかなかっただろう。それも後から艦隊に加わつたものだったような気がする。

### マルコ・ポーロからアヘン戦争へ

ヨーロッパ世界のアジア進出では、イタリア人コロンブス（一四五〇〜一五〇六）が大きく浮かび上がってくる。コロンブスは、一四九二年、黄金の国ジバングないしチパングを目指して大西洋を渡って、アメリカ新大陸を発見したことになる。当時のヨーロッパ世界に冠<sup>かん</sup>たるイスパニアのイザベラ一世女王（一四五〇〜一五〇四）の後援があつたといつても可

発見の緒を開いた。一四九三年帰国。第二回航海（一四九三〜一四九六）ではハイチに植民。第三回航海（一四九八〜一五〇〇）ではトリニダードを、第四回航海（一五〇二〜一五〇四）ではホンジュラスを発見した。しかし宮廷は彼を重用せず、彼

ロンブスが乗ったサンタ・マリ号は木<sup>こ</sup>っ端帆船だった。今でも、そのレプリカが、バルセロナの港に係留されて観光客を待っている。



コロンブスを動かした黄金の国、ジバングの出所はマルコ・ポーロ（一二二四〜一二三四）の「東方見聞録」である。ベ

は死ぬまでアジアの一部を発見したと信じつつ失意のうちに死んだ。マルコ・ポーロが一二七二〜一二七五年、東方諸国で見聞したことを、一二九八〜二二九九年にジェノバの獄中で同囚

ニスの商人マルコ・ポーロがジェノバの獄中で口述したという、三百代言を書き写した「東方見聞録」である。コロンブスはイタリア人だったから、「東方見聞録」熱心に読み、それに書き込みまでしていた。ジバングへの夢を繰り返し確認していたのだろう。

マルコ・ポーロが、元王朝の中国を後にして父親と叔父の三人で、二五年振りにベニスに戻ってきたのは一二九二年だった。コロンブスがポルトガルの港を発ったのは、奇しくもマルコ・ポーロがベニスに戻った時から二百年後の一四九二年だった。数多くの写本・異本があった東方見聞録がラムージオによって集大成されて編集刊行されたのは一五五九年だ

ルスチケロに口述筆記させたとされる。元代の中国を詳しく、日本もジバングの名で初めて欧州に紹介。アジアへの関心をそそり、新航路・新大陸発見への一つの誘因もなった。

から、コロンブスはそれ以前のどれかの写本の一冊を懐ふところにしてジバングへの夢を膨らませていったのだろう。

マルコ・ポーロの「新大陸発見」から百年近く経った一五八八年、日の没することのないと言われたスペインの海上覇権は、その無敵艦隊の壊滅と共にイギリスとオランダに篡奪さんだつされた。一六〇〇年には、イギリス商人がエリザベス女王の特許を得て東インド会社を設立。東インド会社は大英帝国の植民地獲得の先兵としてアジア各国の臨海部に商圏を拡大し、インド・ムガル帝国の領土も侵食していった。そして中国からの紅茶輸入が大幅の貿易赤字を生んだことに端を発し、それを購入する銀を得るためインド

「謎の共同編集者」マルコ・ポーロの「東方見聞録」異聞―鈴木徹也 帝京大学外国語外国文学論集 第九号  
スペインがイギリス侵攻に派遣した艦隊の呼称。一三二隻

からケシから作られる麻薬、阿片あへんを中国に持ち込んだため、前述の阿片戦争あへんが引き起こされることになったのである。

ペリーの艦隊が黒船でなかったら  
今、北朝鮮が、麻薬や偽札やミサイルなどを輸出して外貨取得に躍起になっているが、二〇〇年近く前に、イギリスが赤字減らしの商業活動として同じことをやっていたのだ。イギリスがスペインから制海権を篡奪した先兵が、イギリスの海賊だったことを考えると、今の北朝鮮の行為も分からなくはない。北朝鮮の非は、国家の存立は正義をもって飾り立てなければならぬという基本を危うくしていることにあるのかも知れない。  
話を戻そう。一八四〇年に始まった阿

(兵員二万四千人の艦隊だったが、ドレークらの率いる英国艦隊に惨敗。この敗北がスペイン没落の序曲となった。)

片戦争の現場に目を移すと、前述の通り開戦時にはイギリス艦隊は帆船が中心だったはずである。清朝の軍首脳は、帆船艦隊なら攻められても沿岸部に限られると多分、多寡を食っていたのだと思う。

ところが、そこに蒸気機関で動く軍艦が現れた。それが風向きなどをもちもせずに揚子江を溯航してくる姿を見て驚愕したに違いない。それで清朝は戦意を喪失したのだろう。中華思想に縛られた清朝は、清国に恭順の意を表して外国人が運んでくる新式の技術は珍重したが、その文明の利器を持って攻めてくる外国があるなどとは想定してはいなかっただろう。

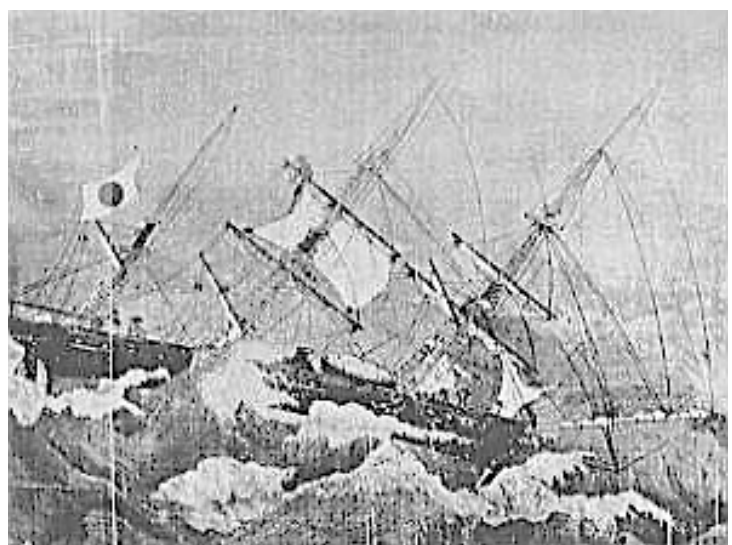
あくまでも想像だけれど、徳川幕府も、すでにいろいろ世界情勢に関する情報が入ってはいたけれど、大部分の人た

ちの意識は、阿片戦争当時の清朝の人たちと似たり寄ったりではなかったのはないだろうか。

しかし、時代が幸いした。浦賀沖に四隻の蒸気船の黒船艦隊が現れたのは、阿片戦争の後、約十年、一八五三年のことである。当時、幕府には対抗して出撃できる軍艦がなかったことは中国清朝と同小異だった。その事実は清朝での出来事を通じて伝わっているはずであり、うでに日本では彼我の戦力の違いを疑う者はいなかったと思う。

未だ、咸臨丸は購入されてはいない。江戸幕府は、当時、江戸防衛のために台場に砲台を築くだけの防戦一方である。

これは仮定だが、もし、ペリーが黒船ではなくて帆船で来航していたら、幕府



の対応は全く違ったのではなからうか。江戸の防衛のために開国に踏み切る大英断は出来なかったろう。相手が帆船だったら、江戸の幕閣は威信を誇示するためにも、アメリカ艦艇を撃滅する主戦論に傾いたかもしれない。

## 「歴史技術説」

浦賀沖に出現した艦隊が全艦蒸気船であつたことが、ペリーの奉呈したアメリカ大統領親書を受け入れ、開国に踏み切つた幕閣の最大の判断材料になつたように思われる。ともかくイギリスに二十年近く先行して戦闘艦隊の蒸気船化に着手したのがアメリカだつた。アメリカは、蒸気機関車より前に蒸気船の実用化を促進した国だったのである。

イギリスが鉄道によって陸上の時間距離を短縮し、内陸に向かつて「市場化」と「標準化」を推進した。ほとんど同時に、それに対してアメリカは蒸気機関を船に搭載することで、海洋を越えて世界の「市場化」と「標準化」を主導する道

を歩み始めたのである。

もちろん、アメリカが世界を主導するという意識を明確に持っていた痕跡はない。独立以来、「孤立主義」が息づいており、その延長線上で、一八二三年には有名なモンロー・ドクトリンを打ち出したし、二十世紀に入っても第一次世界大戦に参戦したのは開戦から三年後であり、大戦後の国際連盟にも加盟しなかつたのである。

アメリカが世界に先駆けて蒸気船を普及させることになつたのは、アメリカの開拓が、その地勢から河川と湖沼を利用して進められたことに起因している。そして、その延長線上で、世界に先駆けて蒸気機関駆動の軍艦を導入することにな

つたのである。建国から日も浅く、イギリスのように大きな帆船艦隊もなく、身軽に新技術の導入を進めることができたという要因も無視できないだろう。

繰り返しになるが、こうしたアメリカの蒸気船の発達の歴史には、アメリカが世界の主導権を握るといふ意図や選択が働いていたといふ痕跡は微塵もない。

しかし、当時のアメリカの政治的な意図とは別に、蒸気船を軍艦に採用した時から、アメリカは海を隔てた国々に門戸開放を迫り、世界を「市場化」し、「標準化」する主役となり、その役を演じ続けてきたことは歴史的事実である。その先駆けが欧州の帝国主義と植民地主義で、それをアメリカが引き継いだ形だが、そ

Monroe Doctrine アメリカの基本的な外交方針の一つ。ヨーロッパと一線を画すという姿勢は、アメリカ独立革命のころから見られたが、一八二三年に第五代大統領モンローが初

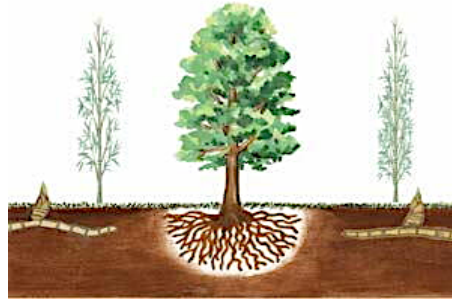
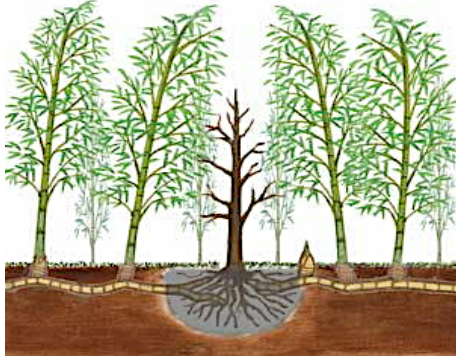
めてこの立場を明確にした(モンロー宣言)。この「モンロー主義」と呼ばれる外交方針は、その後繰り返し表明され、アメリカの基本的な外交原理の一つとなつた。しかし、時代の

推移とともに拡大解釈され、二十世紀に入ると、アメリカの新大陸諸国に対する干渉を正当化する原理にもなつた。



ここに政治的な意図や選択が働いていたとは思えない。蒸気機関を船に搭載したことからくる歴史の必然としか思えない。

こんなことを考えていたら、技術が地下茎のように延び拡がり、それが地上に現れて芽を吹いて、歴史を動かして行くというような仕組みが目に見えんできた。



それを「歴史技術説」と呼ぶことにした。人類が太古から育ててきた技術の地下茎が歴史を決定的に動かしているという仮説である。今や、この技術の地下茎は地球を覆い、大気圏外にまで届くようになってきている。

地下茎が素朴だった時代は、それを剪定するなど人が積極的に地下茎を制御することも可能だったろう。しかし、それが網細血管のように地球全体をカバーするようになった現代では、ますますこの地下茎の自律的な動きに、技術の赴きによって歴史が動かされるようになってきているような気がする。

アメリカは、イギリスとは違って蒸気機関を馬車ではなく、まず船舶に適用することによって、陸ではなく海を制覇する技術を発展させた。そのため建国以

来の「孤立主義」にもかかわらず世界を主導する役割を担うことになってしまった——蒸気機関の発達を眺めていたら、この歴史的事実に直面し、そこから「歴史技術説」という仮説が頭に浮かび上がり、今回の「時空の漂泊」のモチーフになってしまった。

この「歴史技術説」に従えば、アメリカは多くの分野で最先端の技術を持っており、それを持っていることがアメリカの意思決定を否応なしに左右して行くということになる。大量の原水爆弾を保有し、最先端のロケット技術を開発し、監視衛星を巡らし続けているアメリカは、その意志とは無関係に世界政治の主導権を放棄することはできないということである。もっと言えば、アメリカは最短でも今世紀一杯は世界の政治経済のヘゲモ

ニーを保持するだろうという推論に辿り着くことになる。

### パンドラの箱に尋ねたい

もちろん、アメリカの現在の政治の中枢部にいる人たちが、ここで披露したような「歴史技術説」に対して、どのような見解を示すのかは定かではない。余りに単純で決定論的な仮説であることは十分に承知している。様々な力が、時として無関係に作用し、その結果として今後とも歴史が積み重ねられていくのだろう。しかし、私は、歴史の基本的な潮流は「歴史技術説」に軍配を上げることになるに違いないと思うようになっている。

ともかく十八世紀後半のイギリスの蒸気機関の発明と開発と導入の現場では、その膨大な波及効果を含め、それによって歴史が動くとは微塵みじんも思われていなか

ったはずである。文献をいくら調べても、歴史に対する明確な見識や見通しあつたとは思われない。

蒸気機関車に先行して蒸気船が普及したアメリカも同じことで、ミシシッピを上下する豪華な外輪船がいりんせんでカクテルを楽しむながら賭博とばくに興ずる人たちのうちのいったい誰が、それが、ペリーが艦隊を率いて日本の門戸開放を迫ることにまで繋つながると予想しただろうか。

十八世紀の蒸気機関の誕生から、その後を追いながら「時空を漂泊」したら、偶然が十重二十重とえはたえ、上下左右、東西南北に重なり合って流れてきたと考えていた歴史が、実は偶然ではなく、歴史の必然の轍わだちに嵌はまって動いてきているような、これまでとは違う一つの姿が浮かび上がってきたように思う。まさに「時空の漂

泊」の醍醐味だいごみである。

アメリカは、旧大陸に対する反発と自立から「孤立主義」が建国以来、その根底にあって、かつては不干渉主義を世界に向かって標榜ひょうぼうした。そのアメリカが、最近では、「人道主義」の確保・維持・普及という御旗を掲げて、世界に向かって主張している。

そうしたアメリカの姿勢に異論がないわけではないが、その明快さには、技術の明快さに極めて近いものを感じる。この明快さが、多くのアメリカ人の共感を得て、多くの問題を抱えながらも、アメリカ人であるという一体感の意識を生み出しているのだろう。それは、多分、多民族国家あるいは多民族社会——歴史的に眺めれば、現存する多くの国が何百年、何千年も前にすでに経験してきてい

ることなのだが——という意識が新しい国だけに色濃く残っているアメリカにあつては、必要不可欠なことなのかもしれない。

そうだとすれば、現在、アメリカは技術に対しても相性の良い国であり、社会であるということになる。諸々の価値判断に左右される「美しさ」をもって多様性を統合するのではなくて、分かりやすい「機能」の優劣をもって多様性を統合して行こうとする。それ以外ではなかなかアメリカというものを統合することが難しいということが、実は、価値観の問題ではなく、現在の世界にあつてアメリカが担えると同時にアメリカに期待される真骨頂のように思えてくる。

パンドラ。ギリシャ神話における地上最初の女。プロメテウスが天上の火を盗み人間に与えたのを怒ったゼウスは、仕返しに人間に災いをもたらせようと、泥から人間の女を作

もつとも私個人が、技術進歩が歴史を動かしているとする単純な「歴史技術説」という私自身が提唱する仮説を、自分の価値観に照らして全面的に肯定しているわけではない。ギリシャ神話のプロメテウスが天界から火を盗んで人に与えた結果、パンドラの箱が開いて災いと悲劇を撒き散らしたという話は今でも生きていると思っているからである。

今回は、何やら禍禍しい物言いだ締めくくることがなくなってしまったが、これも、「時空の漂泊」のなせる業というか功德ということにさせて頂きたい。連想の糸がギリシャ神話に繋がることがあれば、「時空の漂泊」の場を借りてプロメテウスと言葉を交わし、プロメテウスの

り、あらゆる災いや害悪が詰まった手箱を与えた。彼女は見てはいけないと忠告されたが、好奇心から開けてしまった。その中身はたちまち四方に飛び散った。パンドラはあわてて

所業に怒ってパンドラを造り、それに開けられるということを予想しながら、人間の「不幸」の元になるものを詰めた小箱を持たせたゼウスの恣意について問い掛けてみたいと思っている。

(壺宙計画)

蓋をしたが、その中にはむなし「希望」だけが残ったという。 Zeus。ギリシャ神話の最高神。